



地元住民らとの合同防災訓練で、段ボールベッドを作製する
松山学院高の生徒＝14日午前、松山市北久米町

南海トラフ巨大地震に備えようと、松山学院高校と地元住民らの合同防災訓練が14日、松山市北久米町の同校であり、生徒約60人と久米地区自主防災組織連合会などの計約780人が災害時の対応を確認した。

南海トラフ巨大地震に備えようと、松山学院高校と地元住民らの合同防災訓練が14日、松山市北久米町の同校であり、生徒約60人と久米地区自主防災組織連合会などの計約780人が災害時の対応を確認した。

南海トラフ巨大地震に備えようと、松山学院高校と地元住民らの合同防災訓練が14日、松山市北久米町の同校であり、生徒約60人と久米地区自主防災組織連合会などの計約780人が災害時の対応を確認した。

巨大地震に備え 学んだ知識活用 地元住民と訓練

まつやまがくいんこう
松山学院高

南海トラフ巨大地震が発生したとの想定で、生徒らは看護、福祉、調理などの専攻を生きかた、近隣の福祉施設から避難誘導や応急措置などに取り組んだ。

救命講習では、看護科生徒が自動体外式除細動器(AED)や胸骨圧迫(心臓マッサージ)などを住民に指導。「胸の中央に手の付け根を当て、5秒沈むように押してください」などとアドバイスした。

調理科生徒は賞味期限が近い非常食を使ったアレンジ料理を提供した。避難所で使う段ボールベッドやパーティションの製作体験もあった。

読もう!



能登半島地震の被災地ボランティアに参加した普通科1年藤井夏帆さん(16)は「能登では雪が降り、体育館の床が冷たかったので段ボールベッドがあると寒さをしのげると思った。消火器の使い方も初めて学び、火災時には積極的に消火活動に取り組みみたい」と感想を話した。

同連合会の仙波利一副会長(74)は「訓練は万が一の備えになる。まずは自分の身を第一に守り、助けられる人を助けてあげることが今回学んだことを生かしてもらえれば」と語った。

(水原奈々)